和歌山大学教育学部

2021 年度　共同研究事業

「和歌山大学を中心とした ESD for SDGs コンソーシアム推進」

研究代表：教育学部　岡崎　裕

和歌山大学教育学部附属中学校　山口康平

和歌山大学教育学部附属小学校　中山和幸

本事業は和歌山大学教育学部と同附属中学をはじめとした附属学校、及び和歌山県と和歌山県周辺域に所在する地域の学校による連携のもと、『２１世紀の社会を生きるうえで必要となる資質・能力』（２１世紀型能力）の育成を目指し、SDGs 推進を目指す共同研究のための枠組み「和歌山 ESD for SDGs コンソーシアム」を組織し、ここを起点として共同研究の成果を地域全体としてすることを通して教育の質的向上を図るものである。

和歌山大学は第３期中期目標において「附属学校３校が連携し、『多様な特性のある児童・生徒が共に学びながら』（インクルーシブ教育）、『２１世紀の社会を生きるうえで必要となる資質・能力』（２１世紀型能力）を高めるための教育について学部・大学院との共同研究を行う。その成果を、和歌山圏域における地域特性を活かした『持続可能な社会の担い手育成』（ＥＳＤ）のための先進的教育モデルとして、地域の学校に提供する。」としている。「ESD」と、これに近い文脈において語られる「SDGs」との関係については、昨年の本事業報告に詳しいので割愛するが、概略すれば ESD(持続可能な開発のための教育)は、SDGs（持続可能な開発目標）のための手段として理解することができる。

和歌山大学附属中学校においては、2019 年度入学生からの「総合的な学習の時間」の全面的更新にあたり、明確かつ具体的な目的(Goals)として国連による SDGs を位置付け、持続可能な開発のための教育（ESD）活動を進めることとした。こうした取り組みに際し、和歌山大学としてはこれを教育学部連携事業による地域との共同研究事業のひとつとして位置付け、広く和歌山県域（和歌山県、および大阪府南部地域など）を視野に入れながら「和歌山 ESD for SDGs コンソーシアム」を組織し、研究を深めることとした。

2021年度　和歌山大学教育学部共同研究事業

和歌山大学を中心とした

ESD for SDGsコンソーシアムの推進

ESD（持続可能な開発のための教育）は、環境、開発、人権、など現代の社会問題を我が事として捉え取り組む「持続可能な未来」を目指す学習活動であり、またSDGsは、国連で合意された「持続可能な開発目標」です。したがってESD と SDGsは「手段（教育）」と「目的」の関係にあたります。こうしたことを受け、和歌山大学教育学部ならび に同附属中学校では、この世界共通の目標(SDGs)に向けた教育活動(ESD)を広く推し進めるため、学校を始めとした諸団体との連携・協働による「和歌山ESD for SDGsコンソーシアム」の体制を構築し、協働体制を整えつつ、地域全体として持続可能な社会発展に向けた教育・研究活動を行います。

ここでの研究活動と教育実践を通じ、『２１世紀の社会を生きるうえで必要となる資質・能力』（２１世紀型能力）の育成を目指すとともに、地域全体の教育の質的向上を目指します。

和歌山大学教育学部 教職実践支援ユニット
〒640-8510 和歌山市栄谷930番地
TEL: 073-457-7303
Mail:csc-jimu@ml.wakayama-u.ac.jp
担当教員：岡崎　裕（教育学部教授）

計画の開始からこの間、附属中学校のほか附属小学校での実践も進み、ほかにも和歌山大学教職大学院に関連する学校や、大阪府下の複数の学校においてもそれぞれ独自の取り組みが進んでいる。また、和歌山大学においても、本事業を通して SDGs 全体の実践研究ターミナルとしての機能を果たすほか、著者(岡崎)が中心となって、大阪府、並びに和歌山県のそれぞれの消費生活センターによる「SDGs12（つくる責任、つかう責任）」に関連する消費者教育の担い手育成事

業、あるいは「SDGs13」あるいは「SDGs14」に関わる、児童・生徒による海洋ゴミの回収とこれを通した環境教育活動に取り組んでいる。

ただ、本共同研究の活動時期とコロナウイルスの感染拡大が完全に重なったことにより、和歌山県域諸学校における SDGs に関連する学校実践の連携という当初計画していた目標には、現在までに至ってはいない。社会的情勢が好転し次第、本研究は本来の軌道に戻す所存である。コロナ禍下における学校教育のあり方を論議することは本稿の目的から外れるため他稿を期すが、ただここにおいて、コロナ禍によって導かれた「オンライン」の進展は、災の中で期せずして得られた成果として、本研究においても是非今後に活かしていきたいと考える。こうした社会的に困難な状況のなか、和歌山大学附属中学校の山口康平教諭、そして同附属小学校の中山和幸教諭の実践について報告することとする。

山口教諭の実践「和歌山×SDGs　3rd stage」は、2019 年 4 月の新入生から開始された、SDGs を基礎とした総合学習のプログラムであり、その 3 年目（3rd stage）として本年度実施された実践の報告である。附属中学校の一つの学年全体を対象とした３ヵ年に渡るプログラムで、その構造は、基本的に 1 年目：情報収集、2 年目：計画立案、3 年目：地域における実践という形で構成されている。初年度、30 以上にのぼる小グループによって開始された生徒主体のリサーチ活動は、３年目となる今年、「海や川の環境保全」、「資源・ゴミ問題の解決」、「農業中心とした地域活性化」、「観光による地域の活性化」といった４つのプロジェクトの実践に収斂され、生徒自身が現実的に地域社会に貢献しうるような「深い学び」へと繋がる仕組みになっている。それぞれのプロジェクトの実践の様子、並びにそれらの総括の実態については報告に詳しいが、そこではいうまでもなく、コロナ禍による影響を大きく受けている。ただ、ここでのスケジュールおよび授業展開にかかる負荷は、こうした状況下における教育の技術的進化に貢献している。それは、期せずしてこの学年より運用が開始された、タブレット端末による授業の ICT 化が功奏したと言える。こうしたことから本実践は（結果論ではあるが）「GIGA スクール」時代の SDGs 教育実践の先行的好事例となった。

続く中山実践は、和歌山大学附属小学校の５・６学年複式学級を中心として、和歌山市内の３つの小学校および和歌山市役所と連携しパートナーシップを構築することによって、広く地域としての SDGs に向けた教育活動を展開する。この枠組みの中で、令和 3 年度においては学習対象として市内に所在する「友ヶ島」の漂着ゴミの問題を取り上げて学習プロジェクトを構築している。このカリキュラムでは、対象に対するアプローチを「ヒト」「モノ」「コト」のそれぞれの視点から構造化し、時系列の中でゴミ問題を考え、その解決に向けて実践する段階として「マイチャレンジ」を位置付け、さらにここで得られた問題意識とその解決に向けた取り組みについて、地域社会全体として持続的に推し進めようとする「パートナーシップ」の段階を設定する。こうした構造により、単に学校カリキュラムとしての教育効果に止まらず、地域全体の意識啓発と連携体制の強化、そして何より実際的な自然環境の改善につながる仕組みを企図している。海洋環境の保全を目指す SDGs 第 14 番目の目標に向けた実践の構造がある一方、17 番目の「パートナーシップ」、さらには 11 番目「まちの持続性」など、この実践を通して多面的な効果が期待される意欲的な実践であると言える。ただ本実践についても、やはりコロナ禍における影響は少なくないと思われ、今後一定の時間的スパンの中で、より大きな発展が期待されるところである。

次項においては以上ふたつの実践に関して、実践者ご本人によるリポートを示す。本共同研究の主旨である「和歌山大学を中心とした ESD for SDGs コンソーシアム推進」は、決して短期間において帰着するものではなく、文字通り持続的・継続的に展開するべき性格のものであり、本報告は、近い将来、社会的に環境が改善した「ポストコロナ」に向けた指標として記述するものである。

実践報告　総合「和歌山×SDGs」3rd stage　～和歌山を持続可能にするプロジェクトを実施しよう！～

和歌山大学教育学部附属中学校　山口康平

はじめに

2019 年度より、本校では総合的な学習の時間のカリキュラムを一新し、SDGs を柱に３年間の探究を行う「和歌山×SDGs」をスタートした。カリキュラムづくりに先だって、岡崎裕教授からすでに SDGs をテーマに探究学習に取り組んでいた大阪府立泉北高校を紹介頂き、担当教員から情報提供をしてもらった。また、生徒たちが地域に出かけていって学ぶ場をつくるために、和歌山における SDGs のキーマンについても紹介して頂き、人脈づくりと連携先の確保から準備を進めた。

１年目の 1st stage では、生徒たちは４人１組で 36 の班に分かれ、持続可能な社会の実現に向けて活動している 38 の事業所を訪問調査し、和歌山における現状と課題を明らかにした。２年目の 2nd stage では、同じ課題意識をもった仲間と３～６名のプロジェクトチームを結成し、課題解決に向けたプロジェクトを企画するための調査研究に取り組んだ。最終の研究成果発表会で発表された 34 のプロジェクト案のうち９つを優秀プロジェクトとして選出し、3rd stage で実施するプロジェクトの柱として位置づけた。

３年間の探究の集大成として取り組んだ 3rd stage であるが、コロナ禍により計画していたイベントが中止になったり、調査研究でお世話になった関係者の方々や他学年の生徒、保護者にも参加してもらう予定にしていたプロジェクト成果報告交流会を実施できなかったりと、大幅な計画変更を余儀なくされた。しかしながら、限られた条件の中でもベストを尽くして取り組んだ附中 74 期生のプロジェクト活動について報告する。

１. 3rd stage の目標

<table>
<tr><td colspan="4">「和歌山×SDGs」３ｒｄ stageの目標</td></tr>
<tr><td colspan="4">地域の課題解決に向けてのプロジェクト実施を通して、プロジェクト実施のために必要な知識・技能を身に付けるとともに、仲間とともに課題解決する資質・能力を高め、地域社会の課題解決に積極的に参画しようとする態度を養う。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">3rd stage</td><td>知識及び技能</td><td>思考力、判断力、表現力等</td><td>学びに向かう力、人間性等</td></tr>
<tr><td>◆プロジェクト実施のために必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解することができる。

◆プロジェクト実施のために情報収集し、活動計画を立てることができる。</td><td>◆何をするのか、何のためにするのかを意識し、課題解決の見通しをもってプロジェクトを実施できる。

◆プロジェクトを実施するなかで、状況に応じて適切に判断して行動し、実施結果についてまとめ、表現できる。
◆活動を通して学んだ自らの思い、自己の成長、学びによる自己の変容を振り返り、表現できる。</td><td>◆プロジェクトチームのメンバーと探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。
◆プロジェクト実施において連携先の方と意欲的にコミュニケーションをとり、感謝の念をもって活動できる。
◆プロジェクトの成功に向けて、状況の変化に対応しながら粘り強く活動に取り組むことができる。</td></tr>
</table>

2. 取り組みの概要

3rd stage では「海や川の環境保全」「資源・ゴミ問題の解決」「農業中心に地域活性化」「観光により地域活性化」の４プロジェクトを設定し、各プロジェクトとも定員 35 名で希望をとり、全員が第１希望もしくは第２希望のプロジェクトに所属して活動を行った。生徒たちは各プロジェクトの中で小プロジェクトチームを自由に結成し、チーム毎にプロジェクトを企画・実施した。教員は４名の学級担任が各プロジェクトの指導を担当し、学年所属の教員２名がフォロー、学年主任である筆者が全体の統括・

支援にあたった。

2nd stage で優秀プロジェクトに選ばれた９つを各プロジェクトの中に位置づけたが、そのままのアイデアでは実施の実現が難しいテーマもあった。また、昨年度に引き続いてそのプロジェクトに参加した生徒のチームは同じテーマで活動を行ったが、新規にプロジェクト参加した生徒の多くは、自分たちなりのプロジェクトを作ろうとして生みの苦しみからスタートすることになった。

年度当初に計画していたスケジュールは下の通りである。ただし、計画時点ですでに例年は５月に実施していた修学旅行がコロナ禍のために 10 月に延期となっていた。本年度の修学旅行では「四国 SDGs 研修」をテーマに、徳島県や香川県で先進的に持続可能な地域づくりプロジェクトに取り組んでいるところを訪れてフィールドワーク研修する計画であった。５月にフィールドワークを通してプロジェクト成功の具体的なイメージと秘密を探り、自分たちのプロジェクト実施に活かせるようにするねらいであったが、事後研修とせざるを得なくなり、結果的には県外への修学旅行も中止となってオンラインでの特別研修に切り替えて実施した。

また、地域体験ツアーのプランニングを考えていたチームがあったので、学年での研修としてバスツアーを９月に予定していたが、これもコロナ禍により中止した。

さらに、ワークショップを開き、SDGs と持続可能な生活のアイデアを伝えたいというチームが、道の駅四季の郷公園にある FOOD HUNTER PARK と連携し、SDGs イベントを開催する計画をしていた。10 月中の休日に、学年で有志を募り、イベントを実施する予定にしていたが、これも中止となった。

このように、対外的な取り組みについては軒並み中止となり、生徒たちは相当に悔しい思いをしていたが、ワークショップで伝える予定にしていた内容を動画編集してネット配信するなど、代替策に切り替えて対応した。そして、最終のプロジェクト成果報告会についても、10 月下旬に延期した上で「プロジェクト成果発表公開収録会」とし、プレゼンの様子を Zoom で各教室に中継して互いに発表を聴き合い、収録した動画とプロジェクト実施報告書をネット公開するようにした。

おわりに

生徒の振り返り　＜A＞＜B＞は「3rd stage を通して自分が成長したこと」、＜C＞は「ｍｙ SDGs 宣言」より

＜A＞成長したと感じることは、地域活性化に対する考え方が変わったことです。初め、地域活性化のゴールは東京や大阪のような人も店も溢れるような都会だと考えて取り組んでいたのですが、そんなことは日本の人口が２倍に増えたとしても無理なことで、訪問先で出会った方のお話を聞いていく中で、日本はたくさんの種類の地域があることで成り立っているということに気づきました。無理な取り組みをしようとするのではなくて、それぞれの地域の良さを生かした取り組みをおこなっていくことが大切だと気づけたことが、この3rd stageで一番成長したことだと思います。また去年や一昨年は、調査後に気になることが出てきたりしたので、積極的に気になることを聞けるようになったと思います。
＜B＞今までは実際にSDGsなどの持続可能な社会に向けた実現プロジェクトをしたことがなかったので、している人の特集などをテレビで見て「そうなんだ、すごいな」と思う段階までしか行けていませんでしたが、自分のことのように考えられるようになったし、「プロジェクトしたいな、持続可能な社会の実現に貢献したいな」と思っていてもなかなか行動に移すことが難しいので、学校で、友達と頑張って考えて実行できて、とてもいい経験になりました。自分たちで考えたことだからこそ「やり切ろう」って思えたし、「自分が死ぬまで地球は大丈夫だろう」といったような考えを完全に改めることができたのは成長だと感じています。プロジェクトを行なっていてデメリットや問題を感じた時、プロジェクト計画の段階が1番大事だったんだなということも学べました。
＜C＞今何が問題となっているのかを捉え、その解決のために身近な何か自分にできることはないのかを探し、探した結果見つかればそれを少し意識していきたいです。反対に、もし見つからなかった場合でも、他の視点に立って解決できる方法を模索していきたいです。実際に、今世界で問題となっていることの大半は自分達が起こし、そのまま野放しにしていたものです。自分達で起こしたものなのだから自分達で解決しなければいけません。その責任を負う重要さや、問題解決のためにやり遂げる力の大切さというものを３年間の活動を通して強く感じました。SDGs達成まであと９年ですが、まだまだ残っている課題はあります。その課題を解決するためには、普段から何を意識して生きていけばいいのかその答えを自分で探し、自分で行動していく。それができれば、SDGsの対象となっている問題の多くは解決されるのではないかなと思いました。

「和歌山×SDGs」は、新学習指導要領に示された「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む『社会に開かれた教育課程』の実現」をふまえたカリキュラム・マネジメントによって実現した。生徒が自ら課題設定し、主体的に学びに取り組むという点においても、新学習指導要領の理念に適っているであろう。ただし、社会との連携・協働のためには担当教員の相当なフットワークが求められる。この取り組みが持続可能となるには、人脈と生徒の課題意識に合わせたコーディネート力が不可欠である。

実践報告　総合「わたしたちのくらしとSDGs～パートナーシップで和歌山の豊かな海を守ろう～」

和歌山大学教育学部附属小学校　中山　和幸

１．はじめに

令和３年１月。中央教育審議会では，「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」を取りまとめられた。

上記の答申において，第一部総論では，社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0 時代」の到来や新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」に対応するためには，一人一人の児童生徒が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな 人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要であることが示されている。

本実践においては，そういった令和の日本型学校教育の趣旨を総合的な学習の時間の取り組みにおいて具現化しようと試みたものである。

２．本実践の主張点

新たな見方・考え方を働かせる「ひと・もの・こと」と出合うことで，子どもは自己の生き方を省察し，より多角的な視点で持続可能な自己の生き方を構想することができるだろう。

（１）本単元における「ひと・もの・こと」との出合い

「ひと」…地域課題の解決に向けて目的を共有し，協働できる多様な他者
「もの」…「様々な地域から友ヶ島に流れ着くごみ」
「こと」…SDGｓにかかわる地域の課題「友ヶ島に流れ着く海ごみ問題」（SDGs14 番）

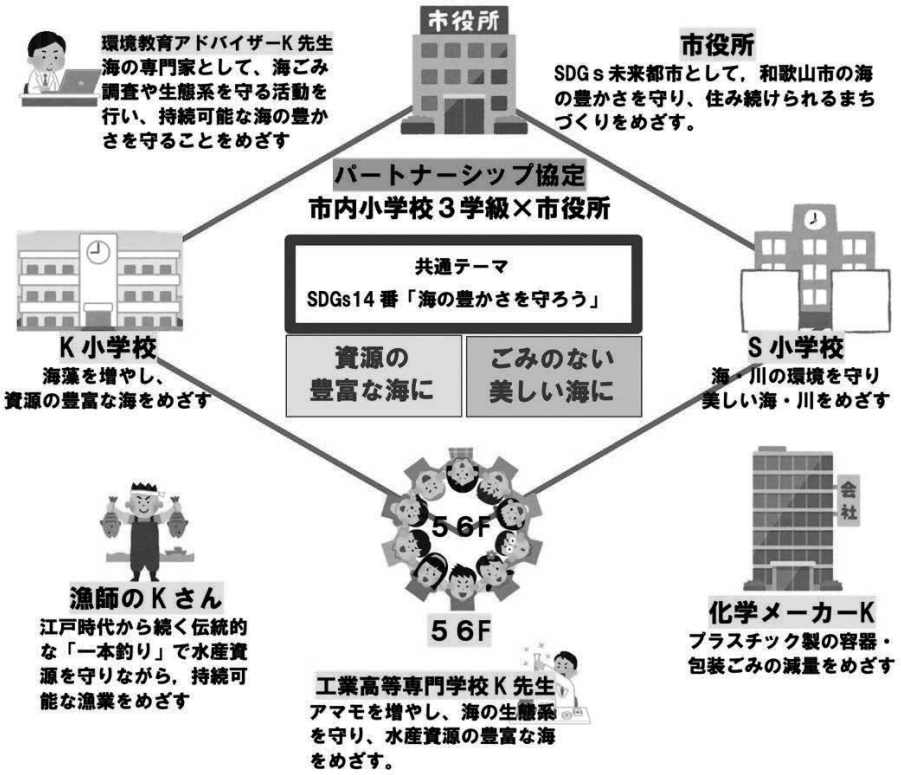
ひと	取り組みや子どもの学習とのかかわり
市役所 （企画政策課）	和歌山市におけるSDGｓにかかわる地域課題の解決，地方創生に取り組んでいる。５６Ｆの子どもに「パートナーシップ協定」を結ぶことを提案し，子どもたちの活動に対して適宜アドバイスをくれる等，学習の伴走者の役割を担ってくれる。海の生態系を支えるアマモを育て放流する活動を一緒に行う。
化学メーカーK	プラスチック製の容器・包装を使った製品を多く開発・生産しており，和歌山市内に大きな工場がある。「環境への負担軽減」と「消費者にとっての使いやすさ・便利さ」の両方を追究し，プラスチックを使った容器・包装の 100%リサイクル化をめざす。プラスチックごみの減量の取り組みを進めている企業の立場から，５６Ｆの子どもに問題解決のヒントを授けてくれる。
加太の漁師 Ｋさん	江戸時代から 130 年以上も続く漁法である「一本釣り漁」を行う。魚を傷つけず，且つ漁獲量を調整することで，水産資源を守りながら，持続可能な漁業を続けている。「海の豊かさを守る」ことは，美しい海にするだけではなく，水産資源が豊富にあることも大切であることを５６Ｆの子どもに教えてくれる。
工業高等専門学校Ｋ 先生	和歌山の海の生態系を守り，水産資源の豊富な海をめざし，アマモの育成にかかわる研究を行っている。アマモポットの作成と放流の指導をしてくれる。
環境教育 アドバイザー Ｋ先生	海洋環境コンサルタントや県の環境学習アドバイザーとして活躍している。友ヶ島のごみ問題の現状やその理由について専門家の立場から教えてくれる。２学期以降も友ヶ島のごみ調査・海岸クリーンに同行していただくなど，学習の伴走者としての役割を担ってくれる。
市内Ｋ小学校 ６年生	市役所企画政策課とパートナーシップ協定を結んでいる仲間。和歌山市内の漁師町にある小学校であり，海が身近にある小学校。「海藻を育て，海の資源を守る活動」を進めている。情報交流をしたり，互いの活動に協力し合ったりし，SDGs14 番「海の豊かさを守ろう」の目標達成に向けて，協働する。
市内Ｓ小学校 ４年生	市役所企画政策課とパートナーシップ協定を結んでいる仲間。「市内の一級河川『紀ノ川』」の学習を進めている。情報交流をしたり，互いの活動に協力し合ったりし，SDGs14 番「海の豊かさを守ろう」の目標達成に向けて，協働する。

（２）自己の生き方を省察し，より多角的な視点で持続可能な自己の生き方を構想する

①「ひと」と出合うことで，多角的な視点で自己の生き方を構想

「海の豊かさを守ろう」を共通目的にする多様な他者と出合い，情報収集・情報交流を行ったり，一緒に活動したりする中で，様々な立場の意見や考えに触れることができる。

このような活動をとおして，子どもは自分の生き方を揺さぶられたり，生き方に誇りや自信をもったりし，よりよい生き方を構想する。



②「もの」と出合うことで，多角的な視点で自己の生き方を構想

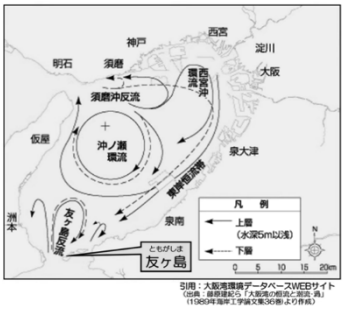
「様々な地域から友ヶ島に流れ着くごみ」

和歌山県の北にある大阪湾は多くの人が暮らす地域に面している。多くの人が出したごみの中できちんと捨てられなかったり，処理されなかったりしたごみが町から川へ流れ出てくる。

海ごみの約８割は陸ごみ由来であると言われていることから，子どもは，友ヶ島に流れ着くごみは，そのまわりに住む人たちに責任があり，自分に無関係ではないことから，自己の生き方を見つめ直し，よりよい生き方を構想するだろう。

③「こと」と出合うことで，多角的な視点で自己の生き方を構想

「友ヶ島に流れ着く海ごみ問題」



友ヶ島にはどうしてたくさんのごみが流れ着くのか？大阪湾にはいろいろな潮の流れがあり，大阪湾に面した地域などから出たごみは太平洋側へと流れ出ていく。その時に友ヶ島に引っかかるため，友ヶ島にはたくさんのごみが流れ着く。また，太平洋側から潮の流れにのって大阪湾に入ってくるごみも友ヶ島に流れ着く。島の北側（大阪湾側）と島の南側（太平洋側）のごみの量を比べると北側のごみが多いが，南側は中国語や韓国語のラベルのごみが見つかる。　このような現状や原因を知った子どもは，この問題は，和歌山県だけの問題ではなく，少なくとも大阪湾に面している地域だけの努力で解決できる問題ではないことや外国からのごみ

も流れ着くことから日本だけの問題ではないことに気付くだろう。
友ヶ島のごみ問題の特性が，子どもの視野を広げ，自己の生き方を考えるとともに他者の生き方にまで自分（たち）が影響を及ぼす必要があると考え，協力を求めるといったことも構想していくだろう。

３．実践の具体について

（１）単元構成について

本単元（全 62 時間）は，以下の２つの小単元で構成されている。

STEP１：マイチャレンジで海をきれいにしよう（15 時間）

SDGs14 番「海の豊かさを守ろう」にかかわりの深い，和歌山市友ヶ島に流れ着く海ごみ問題を解決・解消すべき地域の課題であると考えた子どもたちが，多様な他者とかかわる中で，問題の原因について調査したり，問題の解決に向けてマイチャレンジ（自分にできる取り組み）を考え，行ったりする。

STEP２：パートナーシップで豊かな海を守ろう（47 時間）

和歌山市友ヶ島に流れ着く海ごみ問題を解決・解消するために，自分たちだけで活動していても目標は達成されないと考えた子どもたちが，パートナーを増やして問題の解決・解消をめざす。また，ステップ１では，海をきれいにすることを目標に取り組みを進めたが，ステップ２の途中からは，海をきれいにすることに加え，水産資源豊富な海にすることもめざす。ステップ１は，学級内の活動や各家庭での活動が主であったが，ステップ２では，他者への啓発活動や他者と共に行う活動を進める。きれいで水産資源が豊富な和歌山の海を実現することで，和歌山市において SDGs14 番の目標を達成し，住み続けられるまちづくりに貢献する。

４．実践の考察

（１）「ひと」と出合うことで，多角的な視点で自己の生き方を構想

子どもは多様な他者である「ひと」と出合うことで，様々な立場の意見や考えに触れることができ，そのような経験をとおして，子どもは自分の生き方を揺さぶられたり，生き方に誇りや自信をもったりし，よりよい生き方を構想していくことができると考える。

（２）「もの」と出合うことで，多角的な視点で自己の生き方を構想

本実践において扱った「友ヶ島に流れ着く海ごみ」は，約８割が陸ごみ由来であると考えられており，子どもたちにとって無関係なものではない。そして，子どもが経験した海岸クリーンや河岸クリーン活動の中で拾ったごみの中には，普段自分たちが当たり前に目にし，使っているものも少なくはなかったことから，子どもはよりそのことを実感することができ，自己の生活を見直すとともに，問題の解決に向けて自分にできること（マイチャレンジ）を考え，進んで実行することにつながった。

（３）「こと」と出合うことで，多角的な視点で自己の生き方を構想

本実践において扱った「友ヶ島に流れ着く海ごみ問題」は，大阪湾周辺の街から出たごみが流れ着いたり，海外からのごみが太平洋をとおって，流れ着いたりするという問題の性質から，「自分たちの努力だけで問題は解決しない」「パートナーシップで目標を達成する必要がある」という見方・考え方が自然に生まれた。また，パートナーを増やして目標を達成することが子どもたちのしたいことになった時に，海ごみへの意識調査をアンケートで行うなどの実態調査，アンケート結果から考える作戦，そして，その作戦をブラッシュアップするための大人との協働などが自然と子どもの思考にそって実現されていった。

このようなことから，子どもが多角的な視点をもって，自己の生き方を構想したり，持続可能な社会の在り方を考えることができるようにするには，他者との協働によって解決を求められるような実社会における課題（こと）を子どもの学習問題に据え，単元を構想することは有効であると考える。